

2 「和州赤ハタ」の印銘を持つ陶器（片）について

（1）はじめに

今回の調査では、「和州赤ハタ」の印銘（正確には成形時の押型による銘）を持つ陶器行平鍋の把手（図74-2）が出土した。また、今回の調査に先立つ郡山城第35次調査では、陶器土瓶（急須状）の体部下半に、やはり「(赤?)ハタ」の刻印を持つものが出土している（図74-1）。この両者は、いずれも幕末頃に人為的に埋積される遺構より出土した資料である。以下、この両者の持つ考古学的意義について若干述べる。

（2）事例の検討

ここでもう一度、「赤ハタ」印銘を持つ資料を概観してみよう。まず、図74-2については、先述したように陶器行平鍋の把手部分である。表面には緑釉が施されており、鮮やかな緑色を呈している。また、破断面に見る胎土の色調は明灰色を呈する。なお、先述の「和州赤ハタ」印銘の裏面には「舎」（つまり「山吉」）の印銘がある。

次いで、同1についてはごく小型の陶器土瓶である。非常に薄手、かつ精巧な作りが特徴である。ヘラによる多条沈線を体部上半、および注口部に施している。無釉。なお、「(赤?)ハタ」の刻印は既述のように体部下半に印されている。また、その刻印自体については、村上泰昭が集成した資料中にその類例を見ることができる。⁽⁷⁾

（3）近在窯系陶器について

ところで、ここで見られる「和州赤ハタ」の意味するものは、天明6年（1785）、郡山在住の住吉屋平蔵が近江信楽の「瀬戸物師職人」弥右衛門を招いて焼造を開始したとされる、「赤膚焼」そ

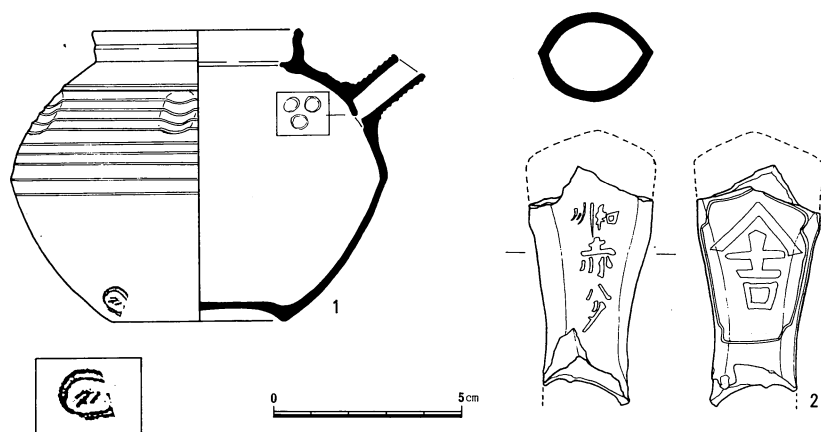


図74 「赤膚」印銘を持つ陶器実測図（S:1/2）

ものである⁽⁸⁾。現在、赤膚焼といえば、奥田木白に代表されるような、すぐれて芸術的な作風、もしくは奈良の観光地の土産物屋に並ぶ、大和絵が描かれたそれが想起されるであろうが、今回の出土資料は、赤膚焼が本来は日常的な雑器類を多量に焼造していたことを示すものとして注目される。

なお、ここにあげた2例は、18世紀末～19世紀後葉にかけて比較的通有に認められる器形である。また、これに止まらず、こうした陶器製品の日常雑器類に占める割合が18世紀の後葉、もしくは末にかけて著しく増加してゆく、という現象はほぼ汎日本的に認められる。筆者はこれを「近在窯系陶器」と名付け、その登場、もしくは盛行をひとつの指標として近世におけるひとつの画期を設定したことがある⁽⁹⁾。その場合、「在地系土（陶）器」という耳慣れた用語を使用しなかったのは、その概念規定を行った段階では、こうした陶器製品の一部が明らかに赤膚焼であるという証拠が存在しなかったことも一因であり、そうした事情を勘案してこのような比較的曖昧な用語を用いたのである。ただし、その中でも若干触れたが、一口に「近在窯系陶器」とはいえ、それらは器種によって明らかに産地の異なるものが含まれている。したがって、近在窯系陶器と筆者が呼ぶものの一部が、赤膚焼であることを確実に示す資料が確認された現在においても、「在地系土（陶）器」の名称を使用することについては、筆者自身についていえば、未だ躊躇せざるをえない。

ともあれ、江戸時代後期に至り、全国各地で非常によく似た形態の陶器製品が盛んに用いられ、そしてそれらはここに例を示した赤膚焼や、近年その実態が明らかになりつつある貝塚音羽焼の事例が示すように⁽¹⁰⁾、主に在地、もしくはその近郊において焼造された製品であった。それは、こと近畿においては肥前磁器等の日常用器に占めるシェアを明らかに蚕食したし、結果としてそれは17世紀後葉の成立以来、多くの変質傾向は見せながらも、辛うじて残存していた「近世的土器様式」を根本より変革していった。そしてそれが特徴型式として示すもの、それ自体が主体となって構築していったものこそ、次代の「近代的土器様式」であった。つまるところ、近在窯系陶器の登場、盛行が示すものは肥前磁器等に代表されるような巨大な商圈の縮小であり、地方窯およびそれに付帯する小域流通がそれに置換してゆく過程であるだろう。

（４）小結

以上、「和州赤ハタ」の印銘と、それが提起する問題について若干触れてみた。もとより本稿は基礎資料の公表と、今後関西においても盛んとなってゆくであろう近世の土器・陶磁器の研究、わけでも特にその研究が遅れている19世紀を中心とする江戸時代後期の資料を検討するにあたり、その予察的な意図を持つものである。したがってここでの記述はきわめて簡略ではあるが、この内にある発展的な要素は、いずれ筆者自身の手により発展させてゆくつもりである。

〈註〉

- (1) 藤田幸夫「豊臣氏大坂城三之丸から出土した桃山時代の刀」『葦火』22号 大阪市文化財協会 1989
- (2) 伊東信雄編『瑞鳳殿 伊達政宗の墓とその遺品』瑞鳳殿再建期成会 1979
- (3) 山川均「江戸時代の道路と金魚池」『古代通信』No.2 大和郡山市教育委員会 1993
- (4) 白神典之「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会 1992
- (5) 難波洋三「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡研究年報』1986年度京都大学埋蔵文化財研究センター 1989
- (6) 服部伊久男『郡山城追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会 1993
- (7) 村上泰昭「赤膚焼の刻印」『赤膚焼』大和文化財保存会 1991
- (8) 高橋隆博「近世赤膚焼の成立」(注7と同一文献所収)
- (9) 山川均「郡山城出土の近世土器・陶磁器について」(未刊、近日公刊予定)
- (10) 貝塚音羽焼研究会ほか『貝塚・音羽焼の諸問題』1993 (シンポジウム「貝塚・音羽焼の諸問題」レジメ)